今どうしようかなぁと迷っているあなたに参考になればいいけど

ねこよう

序章

映画監督って、カッコいいなと思った。
映画館の暗闇の中、銃が連射されて、爆発が起きて、剣の達人が戦って、美女と恋に落ちる。なんて自由な世界なんだろうと思い、暇と時間と金さえあれば、映画館に通った。俺も絶対に名作映画を作って有名になってやる。日本映画界を復活させてやる。周りの友人たちは「アイツはＡＶの監督になりたいみたいだ」なんて言って笑っていた。ただコイツらに黒澤明や小津安二郎の凄さをどう説明しても分からないだろう。
高校二年生の進路相談。もう気持ちの中では決まっていた。
「日本に一校しかない、映画の専門学校を受験します」
柔道部の顧問だった担任の男性教師は
「おれはそういう世界のこと、よく分からないけどな、まあがんばれよ」
入学試験は、当日に分かるお題での創作作文。映画史や演劇史からの筆記問題。個人面接と集団面接。
創作作文は、大好きな時代小説を書いた。それが個人面接では面接官に「君の書いた作品とても面白かった」「俺はこういうの好きだな」と絶賛された。
これで気分が良くなってしまって、「受かった」と確信した。そんな事を考えていた集団面接では、もうすでに受かった気満々で、ほとんど発言しなかった。
野球で、９回ツーアウトで２対０、「もう勝った」と考えてしまうチームは、たいてい勝てない。
落ちた。きれいに落ちた。ものの見事に落ちた。
学校を卒業してしまい、さあどうしよう。とにかく、高校からやっていたコンビニのバイトを続けながら、一年浪人して来年また同じ学校を受けよう。と決めた。
大学に行くための浪人なら予備校がたくさんある。でも、映画の学校に行くための予備校なんてない。とにかく、映画をたくさん観て、本をたくさん読んで、創作作文を五〇本作ると目標を決めて、ひたすらそれに打ち込んだ。
今度の試験―試験日当日に、試験会場の駅で、大学を目指して予備校に通っていたはずの高校時代の友達カネダとばったり会った。
「どうしたんだよ？　こんなところで」
「いや・・・おれも、あそこの脚本家コースを受けようかなと思って」
確かに、カネダは本が好きで、高校の休み時間もよく一人で本を読んでいた。でも、大学が受かりそうもないからこっちならって方向転換したんだろう。そんなに甘いもんじゃねえぞ。と思ったが口には出さなかった。
試験が始まった。創作作文については、頑張って一年間やってきた。という気持ちがあったので、本当にその場で思いついたストーリーを即興で書いた。二人の侍が、決闘をしよう、ということで盛り上がっていくストーリー。途中まではスムーズに書き進んでいったが、い

よいよ決闘という終盤になってきて、良いオチが思いつかない。どうしよう、試験時間は刻々と過ぎている。何とかしないと、という焦りで、追いつめられていく。
エイヤ！と書いたのが、一人の侍が「決闘はやめた」と言い、もう一人も「わしもじゃ」と言い、二人は見物に来た観衆にボコボコにされる。というオチ。
個人面接では、作文について、面接官に「うーん・・・」と声にならない言葉を出されてしまった。ならば挽回しよう、と集団面接に挑んだ。
集団面接のお題は「相撲の土俵で女性が昇るのを禁止にしている」ということについて、賛成派と反対派に分かれて議論する。というもの。
試験官の「じゃあ、反対派をやってみたい人はいるかな？」という問いかけに、いの一番に「はい」と手を挙げた。こういうところの積極性も、試験に加味されるのだろう、とズル臭く見込んで。
自分の中では、土俵に女性がのってはいけない、なんて古臭い考えを吹き飛ばすような新しい発想をバシバシ発言すれば、試験官も「お、彼は革新的な発想が多い若者だ」となてくれるだろう、と皮算用していた。
5人対5人に分かれて、試験官が「じゃあ、始めて」の合図でスタートした。
ここは、議論の突破口が肝心だ。
「じゃあ、そちらの皆さんはどういう考えで賛成なんでしょうか？」と口火を切った。
一番端に並んで座っていた、大人しそうな男性が、それに答える。
「えーと、僕は、土俵に女性が登るのに、反対というのは、もう古臭い考えだと思います。最近は、女性も社会にどんどん進出していますし、男の人と同じように働く女性も多いですし。だから、女性は、土俵にあがっても良いんじゃないかと思います」
ハ？　何言っているんだこいつは？そっちは女性が土俵に登るのに賛成なんでしょう？でも、負けじとこちら側の人が「なぜ女性を土俵に上げてはいけないのか。それは、昔から続く伝統なんですよ」と反論している。・・・・アレ？ひょっとして、オレって勘違いして「女性を土俵に登るのに反対派」に入っちゃってる？でも今さら「あのー僕は賛成派です」なんて言えない。
結局、賛成派の意見にうなづきながらも、自分は反対派だからそこは譲れん。みたいな、どっちつかずの考えになってしまって「土俵を四角にしたら土俵とは言えないから、それなら女性も土俵に上がれるんじゃないか」という案を出して議論が迷走してしまい、試験官に「ちょっと議論が変な方向に進んでいるね」と指摘されてしまった。
試験発表当日、カネダと一緒に合否発表を見に行く。
１３７・・・１３７・・・・１３７・・・やっぱりないか。と思った隣で「あ、あった」という声がした。本当ですか神様。一年間この学校に行きたくて頑張ったワタクシじゃなくて、大学がダメだったからこっち行こうかってスタンスのこいつが受かるんですか？　もう神も仏もないやね。努力すれば花開くなんてのは、嘘だね。
さあどうしよう。2浪して大学ってなら分かるけど、専門学校で2浪ってのは無いんじゃな

いか。だからって別になりたい職業なんて思いつかない。世の中は、バブルがはじけただなんだと言っていたが、まだ「どこかの会社に就職すれば一生安泰」って空気が充満していた。会社に入れば安泰なのだから、慌てて就職する必要もないかな。

部屋の中でそのチラシが目についたのは、本当に偶然だった。この一年間、映画だけでなく、演劇も何本か観はじめていたが、その中で見た公演のチラシ。「劇団員募集」と書いてある。

「劇団いて座・・・アマチュア劇団・・・」

確か、観に行った公演は、出演者のダンスシーンはバラバラだし、明らかな段取りミスもあり、演技も下手な人はほんとに下手。で、楽しいお芝居とは思えなかった。ただ、自分の心理的にレベルの高い所で「なにやってんだお前」と怒鳴られながらやっていく覚悟はなかった。そういうレベルが低そうだから、演劇に未経験の自分が入る余地があるのではないか、と甘い考えがよぎった。

とにかく、ものを造る立場の方に、少しでもいたかった。

1

「あなたが、おくむらようへいさんか。家はどこ？」
「京急の黄金町駅が最寄りです」
「じゃあ、近くて良いね」
と、隣に座った劇団の主宰の田丸さんは、にこっと笑った。
ここは、横浜駅にある、劇団いて座の稽古場だ。電話をして問いかけたら「じゃあ、とにかく稽古を見に来なさい」とびっくりするくらい簡単に言われた。
横浜駅前の喧騒を抜けて、少し静かな住宅街の中にある、アパートの1階が稽古場だった。
「劇団いて座」と書かれたガラス戸を「すいません」と開けると、立ちんぼになった十人ほどの男女が、声を合わせて「あ・え・い・う・え・お・ア・オ」と、発声練習をやっていた。
細長いテーブルの奥に座ると、隣に座っていた初老の男性が話しかけてきた。
それに答えながら、周りを見渡してみる—広さは二十畳ほどだろうか。天井に近い壁には、舞台の照明器具が並んで吊られている。正面の壁には棚があって戯曲本が並んでいる。自分と田丸さんが座っている後ろには大きなホワイトボードがあって「公演が近づいています」
「4／12　駒込　仕事欠席」などが書かれていた。
「じゃあ、今日はアタマからやるか。菊池がもうちょっと力が抜けてセリフを喋ってくれるといいんだけどなあ・・・」
と言った田丸さんが、タバコをふかす。つるんと禿げ上がったおでこにメガネ、でも初老にしてはガタイが少しがっしりしている感じの人だ。その田丸さんの一声が合図のようになって、女性が4人、ワラワラと左側の壁付近に待機した。役者さんなのだろう。その4人の中の、菊池と呼ばれた太った女の人が、「じゃあ、スタート」という声で、突然スイッチの入った表情になり、喋り始めた。
「えー、ここってどこなんだろう？　誰か—、返事してくださーい！　お父さーん、お母さーん、おねえちゃーん————」
「だから力を抜けって言ってるだろう！　言おう言おうとばかり思ってるから、肩に力が入って良い声が出ないんだよ。言おうという気持ちはいいから、力を抜くことだけ考えてやってみろよ。ハイ、もう一回アタマから」
「・・・えー、ここってどこなんだろう？　誰か—、返事してくだしゃーい！　お父さーん、お母さーん、おばさーん、おばあちゃーん、小学校の佐藤せんせーい！　近所のおばちゃーん、宮澤そうりだいじーん！　あれ？ちがったっけ？」
「だからこの前も言ったけど、そこはちょっと調子を変えるんだよ。それまで、お父さーん、お母さーんって叫んでいた調子と違って、ちょっと力を抜いてリズムを変えるの。分からないかなあ？じゃあ、ちょっと前から、続けるよ。」
「・・・おばあちゃーん、近所のおばちゃーん、宮澤そうりだいじーん！　あれ、ちがったっけ？　みんなー、どこに行ったのー？　誰か返事してよー！」

「騒々しいねえ、何を騒いでいるんだい？」
「そんなに騒いだって、ここには私たち以外にだれもいませんのよ」
「行けども行けども砂地よねー。コンビニくらい無いのかしら？」
「じゃあやっぱり、この四人以外に誰もいないのネー」
「いないのネーって、語尾にそんなに力入れないで。そこはちょっとのんびりと、いないのねーって独り言みたいに言うんだよ。菊池、分かるかな？じゃあ、そこもう一回言ってみよう」
「じゃあやっぱり、この四人以外に誰もいないのネー」
「だから力を抜けっていうの、分からないかな？何度も同じこと言わせるなよ。ハイもう一回」
「じゃあやっぱり、この四人以外に――――」
「今度は、この四人イガイにって早口になっちゃってるよ！力を抜こう抜こうって考えすぎちゃってるからそうなるんだよ。さあいつになったら良くなるのかな？もう一回行こう」
なんだ？　なにが始まっているんだ？　この菊池って人の演技が上手くはないのは分かる。でも、この田丸さんの言っていることが全く分からない。よく見てみると、田丸さんは「ハイもう一度」と言うと同時に目を瞑って、右手を頬に当てるとタバコを吹かして苦い表情をしている。なんだ？この人、演技している人を全然見ていないぞ？これが演出ってやつなのか？こんなやり方で良いのか？
結局、４人の女性たちは、何度も何度もセリフの言い方でダメ出しを受けて、砂漠からほとんど進まずに稽古の時間が終わった。周囲で座って見ていた劇団員がワラワラと立ち上がり、ホウキを手に取り掃除している中、田丸さんは隣に座った僕の方を向いてニコッと微笑みながら「まあまた時間があったら観に来なさいよ」と言ってきた。お世辞にも、素敵な微笑みとは言えず、「不器用な人が作りました」と書かれたような作り笑顔だった。

何度か「体験入団」という形で稽古場に通って、この「劇団いて座」というものの姿が、おぼろげながら見えてきた――――劇団員は、２０代から５０代まで幅広くいて、人数は二〇人くらい。稽古は、火金曜日の夜六時三〇分から九時三〇分が基本で、公演が近くなると、水曜日の同じ時間と、土日曜日の朝から夜までが稽古となる。みんな、日常では職を持ち働いていて、家庭を持つ人も何人かいる。照明や音響などの裏方作業も、劇団員が行うみたいで、誰が役者で誰が裏方なのかは、公演ごとに決めていく。そして舞台装置も劇団が手作業で作っていくみたいだ。
今日、僕は「装置製作日」と書かれた日の日曜日の午後に稽古場に行ってみた。いつもの稽古場とは違い、テーブルを全部どかして床にブルーシートが敷かれている。床にはたくさんの木材とトンカチやのこぎりが置かれていて、しゃがんで作業していた男の劇団員たちが、僕を見ると「おー」と言い、よく来た。みたいな空気になってくれた。

「ありがとうね。みんな朝からやっているから、来てくれると助かるよ」
若手で、大学生だという月川さんが近寄ってきてくれた。シュッととやせていて、背が高く、フレンドリーな人だ。
「おくむら君、仕事は大丈夫なの？」
ベテラン団員の駒込さんが声をかけてくれる。ゴリラみたいなでかい体格だが、演技についての指摘は適格で、田丸さんも一目置いている、劇団のナンバー2みたいな人だ。前回に稽古に来た時に、僕が夜中の居酒屋で働いていると話したので、それを心配してくれたのだ。
「大丈夫です」と答える。本当は、仕事が終わったのが昼過ぎだったから、ものすごく眠いけど、そんなことを言ってられない。
メガネで、背が低くて、タヌキみたいな体型のペンキ屋のまっちゃんこと松岡さんが、「じゃあさ、奥村君、この木枠をつなげてよ。こことここを釘で打てばいいから」と、優しい口調で言ってくれた。
うん。歓迎されているなオレ。よーし、これとこれを合わせて、釘打ちすればいいのね。トンカチなんて触るのは中学校の技術の授業以来だけど、がんばろう・・・あれ？あれ？ちょっと曲がったかな？　でもまあ、ちょっとぐらい曲がったって大丈夫だろう・・・
「おまえ、なにやっているんだ？」
しゃがんで作業している頭の上から、声が降って来た。見上げると、ぎょろっとした目つきの、がっしりとした感じのおっさんがこちらを見下ろしている。
「そんなやり方じゃダメだろ？ここととここも曲がってるじゃねえか。いいか？ナグリもそんな持ち方じゃダメなんだ。だから釘も曲がって入っちゃうんだ。こう持つんだよ。それから、ここもちゃんと押さえて打たないと、どんどんずれてくんだよ。ちゃんとやんないと、舞台立たないんだぞ？」
次から次へと注意を受けて、ハイ、ハイ、と答えながら、この人は何者なんだろうかと考える。初対面で、自分の名前を名乗らず、こちらの名前も聞かず、釘とトンカチと木材について、とうとうと語っているこのおっさんは何者だ？　こういうのを、失礼って言うんじゃないのか？「失礼じゃないですか？」と言ってやろうかと思ったが、やめた。このおっさんは、その背中に「怒らせたらおっかないオーラ」をぷんぷんと漂わせている。
結局、そのおっさんは、最後まで名乗らず、僕の作業にじっと張り付いて、アレコレと文句や注文をつけていた。その日の作業が終わると、当然のような感じで田丸さんの隣に座り、田丸さんが「なんとか増井も今日は久しぶりに来れたみたいだから・・・」と皆に話し始める。あー、この人が増井さんか。よく稽古終わりに「装置のことは増井に任せてあるけどよ、どこまで考えているんだか・・・」と田丸さんが言っていた。
帰る前に、増井さんの所に行き、「体験入団のおくむらです。よろしくお願いします」と挨拶をすると、ピーナッツをつまみながら、「きみが奥村君かい。」とニヤッと微笑んだ。
うーん、悪そうな微笑みだ。
劇団員には、もちろん、女性の劇団員だって何人もいた。太った菊池さんは、年齢を聞いて

みると僕の一つ上だったのでビックリ。もっと上かと思った。と、つい口に出してしまうと、「奥村君、あんた、結構言うわね」とジロリと睨まれてしまった。
女性の劇団員のトップは、船井さん。四〇代くらいで、背は小さいが、背筋が伸びている。病院の看護をやっているみたいだけど、田丸さんも船井さんの演技力は認めているみたいだ。稽古は、最初は団員全員で発声練習を行うが、その発声練習を取り仕切っているのが、船井さんだ。その次が、冨多さん。養護学校の教員をしている。スマートで、髪が長くて、周りの劇団員にいろいろと気遣いの出来る人だ。若手だと、美月さんはみんなからみっちゃんと呼ばれている。銀行に勤めていて、笑顔がかわいくて、みんなのムードメーカー的存在。湯座さんは、背が低いけど、目鼻立ちのしっかりした美人だ。そんな美人が「うち、どこなの？」と笑顔で問いかけてくる。それだけでなんだか嬉しいもんだ。
そんなこんなで、いろんな人と知り合い仲良くなっていって1か月、僕は、体験入団という名目でせっせと稽古場に通っていた。
「それで、奥村君はどうするんだ？　入団するのか？」
ある日の稽古の始まる前に隣に座っていた田丸さんからなげかけられて「ああ、はい、じゃあ、入団します」と、答えた。その日の終了後、田丸さんが役者へのダメ出しを言った後、「今さらだけど、奥村君が入団することになったから、伝えておく。」とボソっと言うと、みんながワーっと拍手してくれた。拍手してくれたということは、みんなは僕が入団したことを喜んでくれたということなのだ。うれしいけど、こんなにとんとん拍子で進んじゃって大丈夫なのか？

今は4月。6月の本公演の「トラップワイフ」という外国の戯曲の稽古の真っ最中である。ある男の妻が全く別人と入れ替わってしまった。刑事や神父を呼ぶが全く男の言う事は信じてもらえずに、さらにまたもう一人妻だと名乗る女が出てきて・・・というミステリーだ。主役の男は若手で一番演技力のある吉田さん。まだ２６歳なのにがっしりした体形で柔和な笑顔な人だ。みんなからは「よっちゃん」と呼ばれている。相手の妻役は湯座さんだ。相変わらず田丸さんの演出は「その言い方じゃないんだよな～」「それじゃあオセンチになっちゃう」と意味不明なダメ出しが続いていた。僕は「舞台監督助手」という、まあ舞台のことは何にも分からないんだろうからお勉強しなさいね、という感じの役割になっていた。舞台監督は松ちゃんだから優しく教えてくれる。
「舞台は客席から見て右側が（かみて）って言って、左側が（しもて）って言うんだよ」
「1尺が３３センチで、6尺ってのがだいたい１８０ｃｍくらいなんだ。それで、横が3尺で縦が6尺の張り物をサブロクって言ってだいたい畳一枚分くらい。これが基準なんだよ」
「釘を打つのはさ、力じゃないんですよ。遠心力を使って振るの。だからみんなトンカチの柄のはじっこを持つんですよ」
いろんな事を教えてもらいながら、勉強にはなるけど僕はやっぱり映画を撮りたいなあと思っていた。でも今「実は僕映画の方に行きたいんです」なんて言えない。ここはじっとガ

マンして、教えてもらう事さえ教えてもらったらさっさと辞めちゃおう。と気楽に考えていた。
そうやって、いつものように田丸さんの分からないダメ出しの稽古を見ていたり舞台監督助手として教えてもらったりしているうちに、ムクムクと思いもしなかった感情が湧き出てきた。それは出始めると自分の都合の良い風にしか考えない誠に厄介なものだった。そしてそれは日に日に大きくなっていった。その感情とは
「自分が役者として演技をすればどうなのか？」
稽古を見ていると、田丸さんのダメ出しはよく分からないけど「ここ失敗したな」というのは分かる。だからそんな自分がこうやって表に立って演技すれば、みんなその天性の演技力に感動して、みんなから称賛の嵐がくるんじゃないか・・・マア、そんな入ったばっかの男をすぐに舞台に立たせるなんて甘くはないんだろうけどねエ。と脳内の片隅でぼんやりと考えていた。
それは稽古も残り1か月を切った頃だった。死んだ酒飲みじいさん役の駒込さんをタンカで運ぶ警察官が二人必要だ。ということで、若い男性劇団員と、入って6カ月の川村さんがその警察官と決まっていた。しかし駒込さんはゴリラ体型で体重がおよそ９０キロはあるので床に置いたタンカが持ち上がらない。特に川村さんは優男的な人なので、どうしてもある程度までタンカが上がるとふらついてしまう。困った田丸さんと松岡さんと増井さんがタンカを囲んで唸っている。
不意に「奥村！」と増井さんの声がした。なんだなんだと思って寄っていくと「ちょっと川村と代わってコレ持ってくれるか？」あー、なんかタンカの持ち方のモデルでもやるのかな。こんなもの持ちますよ何度でも。よいしょっと。エ？「オー」ってみんな言ってるけどなんだ？あ、次は前になって持ち上げるんですか？はいはい、じゃあ前に回って、よいしょっと。お？また「オー」だ。なんだなんだ？
田丸さんがこう切り出した。「じゃあ、川村には悪いけど、川村に代わって奥村に警察官役をやってもらうことにするから」増井さんと松岡さんも「おめでとうね」「しっかりやれよ」と声をかけてくれる。
エ・・・・じゃあオレが舞台に立つの？しかも先輩の川村さんの役を取っちゃって・・・

2

黄金町駅と地下鉄の阪東橋駅の間の片隅にその店はあった。営業時間は夜中の１２時から翌朝１０時まで。料理は焼き鳥から刺身からそれなりにメニューのレパートリーは広い、入って右に狭い小上がりの座敷がありそこにテーブルが二つ。左側に茶色い板目のカウンターが並んだ居酒屋だ。お客は、関内駅付近で水商売している人たちが主。水商売って言っても幅広く、ホストやボーイズバーがお客さんと来たりスナックのママがお客と来たりする。

同じ居酒屋が1時や2時に店を閉めて飲みに来ることもあるし、ゲイバーやショーパブのオカマが集団で来たりもする。ヤクザの兄貴が若いのを連れて飲みに来ると兄貴がトイレに立つたびに若いのはトイレ前で立って待っている。詰めれば１２人ぐらい座れそうなカウンターのこっち側でお皿やコップを洗っている時、正面に座った頬に傷のあるヤクザの兄貴分に「兄ちゃん。ここをクビになったらうちに来な」と言われて、ありがとうございます、と頭を下げながら、不器用な愛想笑いをしてみせた。

「そこ洗い終わったら、ちょっと休憩しな」と店主の加山さんに言われる。加山さんはでっぷり太ってパンチパーマ。ヤクザじゃないけど、若い頃はけんかを売ってきたヤクザやチンピラを数々倒したという思い出を飲みに行くとよく話す。なぜパンチパーマなんですか？とは飲みに行ってどんなに酔っぱらっても聞けなかった。

店の奥のイスに座ってラークマイルドに火を点けると「どうしたよ？何か疲れてるみたいだな」と言われ、ハア。だいじょうぶっすと答えた。

今日も、稽古でかなりしぼられてきたのだ。次の公演に警察官の役で出演することに決まり、セリフは無くて戯曲の中でタンカを持ちあげるシーンを含めて3回しか出てこない。こりゃ楽だわラッキーなんて受かれていたが、

「背中を丸めて歩くな！」

「プラプラ歩くなよ！警察官に見えないんだって」

「敬礼をもっとシャキッと出来ないのか！」

「だから背中を丸めるなっての！分かんないか？今度は背中伸ばすと右手と右足が同時に出ちゃってるぞ。セリフ無いんだからな。こんなんじゃセリフのある役やる時には先が思いやられるなぁ」

「やっと歩き方が良くなったと思ったら＊＃＆￥＋」

最後の方は怒りすぎていて何言ってるかよく分からなかった。―という感じで、稽古で俺が出るシーンになると沈滞した空気が流れてくる。今日は稽古の時間の半分くらいが警察官のシーンに使われてしまい、主役の吉田さんや警部役の欣二さんと目が合うと冷たい視線がこちらに向けられていた。ああ神様演技するなんて楽勝じゃんなんでみんなこんなことができないんだろうなんて思いあがってしまってすみません。菊池さん太っていて演技も下手なんてわき役にも使えないなんて思ってごめんなさい。吉田さん今の演技に満足していて甘い人だなんて思ってごめんなさい。湯座さん美人なだけだってごめんなさい。

「歩く」ことは誰だってできる。だが、前から人にじっと見られている状態で「歩く」それも自然に。しかも警察官に見えるように「歩く」のだ。こんな難しいことをオレは出来るのだろうか・・・とか考えていると、飲み屋のお姉ちゃんと肩を組んでもう既に酔っ払った目つきのボーイズバーの若い男が「マスター空いてるぅ？」とのれんをくぐってきた。活舌の悪い「いらっさいませー」を言ってオシボリ保温機のドアを開けて二本のおしぼりを取り出す。

朝の１０時近くになって、客もいないので店の表ののれんを片付けた。朝の９時を過ぎてやって来るお客は昼間に働く普通の感覚だと深夜２時３時。つまりベロンベロンの質の悪い客が来ることが多い。マアたまには優しいお客さんが来ることもあるけど。
カウンターにイスを上げて、店の中を掃き掃除する。加山さんは残った洗い物をしている。
「あの・・マスター、すみません」ちょっと勇気を出して声をかけた。店では加山さんを「マスター」と呼ぶように言われている。
「オオ。どうした？」
「実は、来月の１６日から１８日に休ませてもらいたいんですけど・・・」
「三日間もか？ちょっと待ってよ」
と、マスターは濡れた手を前掛けで拭いて、テレビの横にかかったカレンダーをめくった。
「おー、金曜土曜日曜かぁ・・・・」
週末の土日は一番お客が来て売り上げが見込める。僕がいないだけで店を回せないで断るお客が出てくるので、売り上げの事が気になったんだろう。
「まぁいいヤ。よぉへいちゃん、がんばってくれてるからな」
「すみません。」
「三日間もか・・・オマエ、女の子とどっか旅行でも行くのかヨ？」と、加山さんは泡のついたスポンジで鍋をこすりながら、にやけて聞いてきた。
「イヤいや・・・」
「じゃあ何だよ？エ？　言えよ？ゴニャゴニャ言って隠し事なんてすんなヨォ」
「実は・・・この間芝居やる劇団に入りまして、そこで今度の公演にちょっと出る事になったんですヨ」
「しばいって・・舞台とかでやる、お芝居の？」
「ハァ」
「それに出るの？」
「なんか、そんな感じになりまして・・・・」
「・・・じゃあ、映画はどうすんの？やめんのか？」
「イエイエ、映画の世界には入りたいなって思ってるんです。ただちょっとでも勉強になればいいかなと思って・・・」
「・・・へーーーーー」
この「へー」は、その物事がよく分からないので、良いことだか悪いことだかよく分からない。まあ自分には関係ないから、無理にやめろだの逆に応援してるだの言わないけど、ああそうなのか、という感の「へー」だ。
「で、その芝居に出るってのは、結構セリフとか言うのか？どんくらいの役なの？」
「あー、セリフとかは無いんです。本当ちょっと出てすぐ引っ込むってのが３回あるくらいの役で。ホントにちょい役です」
「あそうなの？ふーん・・・」

セリフも無い役なのに何で休むんだ?だいたいそんなちょい役しかもらえないって、そっちの方に才能無いんじゃないか?と言いたいけど俺は大人だからガマンしているぞ。
というううなづきながらの薄笑い。
本当は、公演の前の金曜日には劇場での大道具を建て込む「仕込み」があって、木金土日と四日間休みたいのだが、そんなちょい役で四日間休むなんて言えない。
「まぁ分かった。じゃあ１６、１７、１８とお休みな。」
「すみません」
「今のうちだけだからヨ。好きな事出来るのは。がんばんな」
「ありがとうございまス」
それっきり、マスターは洗い物に戻って、僕は掃除の続きで手を動かす。でも手を動かしながら、心臓の鼓動は止まらない。言った言ったお芝居しているって言っちゃった。かなり勇気だして言ったのに、こんな感じなのか?この共感の無さ。というか「演劇」というものが世間に浸透していない感。これでセリフあって主役です。とかならちょっと堂々と言えるけど、セリフも無いのに歩くだけが出来なくて困ってますなんて言えない・・・

公演の日が近づいてきて、貸衣装屋で借りた衣装を試着する日が来た。今回はイギリスの戯曲なので、イギリスの警察官の衣装を借りないといけない。稽古場で、貸衣装屋から借りたズボンを履いてジャケットを羽織って鏡の前に立ってみると、アレなんだかそれっぽく見える?
「奥村君、背が高いから似合うねぇ」
衣装担当の美代子さんが微笑みながら言ってくれた。もう大きい子供たちの母親のおばちゃんだ。メガネの奥から柔和な目で眺めてくれる。
「あとは、髪の毛を色が出る髪染めで金色に染めるからね。よろしくね」
ハーイと言いながら、もう一度鏡に映った自分の姿を見てみる。警察官の服装を着てしまっただけで、なんだかうまく出来るんじゃないかと自分の中で根拠のない自信が出てきてしまっている。へー、衣装ってすごいんだなぁ。

稽古は週五日の公演直前体制に入っていった。特にしぼられているのは、湯座さんだ。この妻役がちゃんと「妻」に見えないと芝居全部がガタガタになるからだ。「奥さんはそんな言い方しない」「もっと旦那に甘えられないかなぁ。どこか遠慮しちゃってるんだよ」「その言い回しだと旦那が次のセリフを言えないんだよ。どうしてもここ力が入っちゃうんだよな」とダメ出しの嵐を浴びる日もあった。
僕たち警察官の場面をやる時は「じゃあ警察官もやっとくかな。本番近いんだから、そろそろ警察に見えてこないとね」と田丸さんがぼやいてから始まり、いつものように背が丸まってるだの歩き方が汚いだのと言われ続けていた。こんなにダメなら俺を降ろして他の人にした方が良いんじゃないかと何度も心の中で叫びながら、半ばヤケクソのように歩き続け

た。
「歩く」とは、右足を前に出して、体重をかけてまた左足を前にだす。そしてその逆をやって繰り返す。こんな単純なことが出来ない。しかも僕の癖として猫背があるので、背中を伸ばすよう気にするとぎこちない歩きになり、じゃあ歩き方を自然にと注意するとすぐに背が丸まってしまう。しかももう一人の警察官はほとんどダメ出しされずに文句を言われるのは僕ばかりだった。その人と自分の歩き方にどう差があるのかさっぱり分からなかった。毎回稽古が終わると、一番搾られている僕と湯座さんはお互いでちょっとにが笑いを交わして、がんばろうねがんばりましょうねと言い合っていた。

湯座さんは菊池さんと同じで僕の1コ上だ。目鼻立ちがくっきりしていて美人で色気もあるのだが、ハイライトをスパスパ吸ってビールを飲んで真っ赤になってギャハハと馬鹿笑いしたりとおっさんぽい所がある。背が小さくて「カワイイ」キャラのようにうにゃうにゃ言ったかと思った次の瞬間に「んだとテメエ！」とケンカしていたりする、なんだかよく分からん人だ。が、高校では演劇部にいたそうなので演技の基礎は出来ており、美人でもあるから、劇団の上の方の人たちは若手の有望女優と見ている感があった。
「こんなんで本番うまくいくのかなぁ」とタバコの煙を吐いた後で湯座さんが呟く。
「湯座さんまだセリフで怒られてるんだからいいじゃないスか。俺なんか歩くだけでダメ出しですよ」
「エー？警官なんてオイシイよー。あんな制服ビシッと着ちゃってさ。カッコいいよ」
「でも「お前の歩きはチンピラだ」って言われてるんスよ」
「大丈夫だよ。本番来ちゃえば。それよりアタシだよ。吉田さんの奥さんに見えないとアイツはへたくそだってボロクソ言われるんだよね。あーやだやだ」
と、火のついたハイライトを灰皿でトントンしながら湯座さんはぼやいた。なるほどセリフもらって大事な役柄をもらった人は人で悩んだり嫌になったりしているんだなぁ。

そうこうしているうちに、遂に本番一週間前に行われる最後の通し稽古が終わった。最初から最後までダメ出しで止めないでやりきる通し稽古。この一週間前の通し稽古は、実質的に稽古場で行う最後の稽古である。
これで本番を迎える・・・スイミングスクールで、クロール25m泳げたことないけどテスト当日を迎えた時の気持ちだわ。全く安心してないけど、いつものスクールと違ってテンションだけが上がっているような。劇団員のみんなも、これで後は劇場でやるだけだという思いのためか、ちょっといつもより熱気がある。
その中で自分も何とかがんばんなきゃと思い、舞台監督の松岡さんに「よろしくお願いします」と言いに行った。
「オー奥村君。キャストもあって大変だけど頼むよ」
「何どうした？」と横から声が出た。「あー増井さん。奥村君が頑張るそうですよ」とにこ

やかに松岡さんが答える。
「そっか・・・ひとつ、ケガしないように頼みますヨ。俺らジジイだから、若い奴らに働いてもらわないと、装置が立たないからよ」
―「装置」とは「大道具」つまり建て込む張り物の事だ。役者などが使う「小道具」は「小道具」と呼ばれるが、「大道具」は「装置」と呼ばれている。今回の「装置」の設計は、増井さんと田丸さんが共同で作ったそうだ。
「奥村は、公演の仕込みとか初めてだっけか？」と増井さんは上目遣いにこっちを見ながら聞いてくる。―公演のために前日に劇場に入って、装置の建て込みや音響や照明のセッティングをすることを「仕込み」と言う―「はい初めてです。分からないから何でも言ってください」と頭を下げた。
「そうか・・・本番ってのは、祭りみたいなもんだからな。みんなテンション上がるからワーワーなっちゃうし、いろんなトラブル起こるからよ。よろしく頼むわ」
「オオ、期待されてるねぇ」と松岡さんに背中を叩かれた。
祭り。という意味がいまいちよく分からないままで、ハア。と、とりあえずの返事を返す。
稽古場の中は、いまだに人の熱気と喧騒でざわめいていた。

3

そして、いよいよ、公演の週になった。
6月13日の火曜日、役者は脚本を持ってセリフ合わせのような簡単な稽古を1時間ほど行う。その後で、劇団員みんなで衣装や小道具や事務用品を劇場に搬送するために梱包していく。この光景がすごい。30人ぐらいの大人が、稽古場に小道具のピストルやバッグや酒瓶をダンボールに詰めて「あ、手紙が入ってないよ」「そのガムテープちょっと貸して」とポンポンと声を飛ばし合っている。衣装は衣装で「これ本番で着るんだっけ？」「よっちゃーん、靴が入ってないけどいいの？」「あー、それアタシが畳みます」とやいのやいの言っている。よく見ると、元気に言葉を発しながらも手を動かしているのは主に女性陣だ。男性陣は、女性陣の指示で手伝ったりダンボール箱を運んだりしている。
「奥村君、ちょっといいか？」と松岡さんが声をかけて、稽古場の外の用具倉庫の物置に連れてきた。「ここにナグリやバールの工具箱があるからさ、これを中に運んで、ナグリが何本でバールが何本あるか数えといてくれるか？」物置の中に、ひときわでかいジェラルミンのシルバーのボックスがあった。両手でかかえるとかなり重い。「オイ大丈夫か？」と優しい言葉をかけられたが「平気ッス」とちょっと笑顔をみせてから中に運ぶ。
稽古場の中に入って、工具箱を床に置いて開けてみる。ナグリ―とはトンカチのことを呼ぶ演劇業界の用語だ―や、釘を抜く為のバールがぐちゃぐちゃに入れてある。全部の道具が錆や手垢でうす汚れていて、お世辞にもきれいとは言えない。でも、何年も何十年もいろんな

人に握られて、「舞台を作る」という同じ目的で使われ続けてきたような、何とも言えない存在感がある一つ一つの道具だった。

あさの7時５０分。陽光が引き戸を透して店の中に差し込んできている。店内はいつも一人で来る常連のお客さんがポツンとカウンターに座り、焼酎お湯割りと焼き鳥でちびちびとやっている。

「よぉへいちゃん。そろそろいいよ。支度しな」

すみませんと頭を下げて、更衣室に着替えに入った。今日は６月１６日の金曜日。昨日の１５日は夕方から公演用の荷物をトラックに運び込み、２１時過ぎに終わって帰ってから１時間ほど休んですぐに店に入った。今日は朝の９時に劇場に集合なので、少し早く上がることになっていた。着替えを終えたら、店に出てカウンターの中にいる加山さんに

「すみません。じゃあ三日間休ませてもらいます」とまた頭を下げる。

「おお。で、いつなんだ？その公演ってのは」

そう言えば、そんな事さえ言ってなかった。

「あ・・・土曜と日曜です」

「ふーん・・・そうか」

じゃあお先に失礼しますと言い、店ののれんを出た。アレ？公演の日を聞いてきたってことは、加山さんはひょっとして公演に観に来てくれるのかな？実は言ってなかったけどお前のこと陰ながら応援しているぞ、的な？だとしたら、ちょっと感動的な話しだなぁ。オレがもしかして有名な俳優とかになっちゃったら、あの若い時に・・・みたいなエピソードで使えそうだなぁ・・・とボーっとした頭で考えながら歩いた。

劇場に行くと、先ずはトラックの荷物をビルの１階の搬入口から劇場のある二階まで大型エレベーターで運び込む。そして、「じがすり」と呼ばれる、カーペットのようなものを舞台全面に敷いていく。舞台上は通常フローリングのような板目だが、これを敷くことで役者の足が滑りづらくなり、足音も吸収される。それにお客から見た時にそのまま板目よりも舞台が「映える」のだそうだ。その後、舞台上をメジャーで測定して、舞台装置を建て込む場所に線を引いたり×を点けたりする。これを「バミリ」と呼んでいる。

作業は役者も裏方もなく、劇団員全員でやっている。基本的に男性は装置建て込み、女性は衣装や小道具の整理やロビーの受付設置、という感じでおおまかに役割分担されているみたいだが、特にしばりは無いようで、湯座さんや菊池さんは男の団員にまぎれて楽しそうに装置の建て込みの方を手伝っている。

増井さんと松岡さんがどうやって建て込むか相談し、男連中に「あそこについてくれ」「よっちゃんと川村でこれやってくれ」と指示を出していく。当然僕にも、「あの作業のおさえるのやってくれ」「あれ持ってきてくれないか」と指示が飛んでくる。だが最初は「奥村君」と丁寧に呼ばれていたのが、作業が進むにつれて「奥村くーん」となり「おくむらちゃん」

と変化して「おくむらぁ」となってしまった。この瞬間に時計を見ると１０時４５分。オオたった1時間４５分でオレ呼び捨てになったのか。
やっと昼食の休憩となっていた。みんなで楽屋に入り、それぞれが持ってきた昼ご飯を食べる。来る途中にコンビニで買ったパンを食べていると
「奥村、オマエ、仕事上がりか？」頭を上げると増井さんだった。
「はあ。朝まで働いてました」
「じゃあ、昨日の夜からか？寝てねえのか？」
「はぃ」
男だけの楽屋でみんながこっちに「エ？」という目線を向ける。
「そうか、若いから出来るよな。俺ら寝てなかったらフラフラしちゃうよ」
とりあえずの愛想笑いのへへへ。本当はすごい眠い。食べないと倒れるから食べてけど、食欲なんてほとんどない。でも役者なんだから、途中で作業から抜けられて、楽屋で過ごす時間があるんだろうと想像していた。それがたぶん1時間もしかしたら2時間くらいはあるだろうから、その間だけでも目をつぶろう。
午後になると、どんどん作業は進んでいった。ただのベニヤに厚みをつけただけに感じた張り物が、こうやって建てられていくと、本当の壁のように思えてくる。「そっち持ってよ」
「ちゃんとおさえていてくれ」「そこ釘打ってキメといて」という声に混じって、音響や照明スタッフの声も入ってくる。「次、三十二番入れて」「それさ、ちょっと上手の方に振ってくれる？」「ちょと音出しまーす」「バキューン」スピーカーから流れる音響とガンガンというナグリで釘を打つ音。照明の叫び声。声と音のカオス。「あー、だから、ずれてるって」
「ピンポーン」ガンガンガン！「レベル７０に下げて！」「3番の張り物持ってこーい」「ここ、明かり当たっている？」ガチッ！ガチャ！「ピンポンピンポーン」「次のフェーダー上げて」「もう一度レベル１０上げて出して！」「あー、それ3番じゃなくて4番だろお！」ガチャガチャン！「もっと下に振って！」「ピンポンピンポンピンポーン！！」

舞台奥の窓の外に見える、山の景色を固定する作業に入った。窓が3個もあるので、その「山の景色」は高さは１８０ｃｍぐらいだが横は６ｍくらいある。それを何人かで運んで、窓外にセッティングする。僕は端っこを持って運んでいた。客席から松岡さん増井さんが見て
「もっと下手に行って」など指示を出す。
「よーし、そこでいいヨ。釘打ってキメちゃってくれ！」
そうか釘を打っていいのか、じゃあ誰かに打ってもらおうと思ったら、吉田さんがナグリと釘を目の前に出して「ホイ。打って」と言った。ゲ、この釘は５ｃｍ以上ある長い釘・・・３ｃｍくらいの釘でも打つと曲がってしまうのに、こんな長いの打てるのか？でもグズグズしていたらまた「おくむらー！」と怒られる。えいもういいやとガツンガツンと打ち込んだら、5打目でびっくりするくらい真っ直ぐと釘が入っていった。おーキセキじゃん。
客席の松岡さんから「釘でキメたか～？」と声がするので、「キメましたー」と答える。

そしたら、松岡さんは客席の二列くらい後ろのど真ん中で座っていた田丸さんに「演出、窓の外の景色、あそこでいいですか？」と聞いた。客席で足を組んでむすっとした顔で作業を見ていた田丸さんは「ダメだよ。もっと上手じゃないと」と答えた。
「もっと上手ですか？」
「そう。もっと上手に山が見えないと全然だめになっちゃうから」
「分かりました。オーイ、釘一回外して、もうちょっと全体カミに動いてくれ！」
なんだよ、せっかくうまく打てたのに。て言うか、田丸さんアンタ客席から釘打ったの見ていたよね？その時に言えばよかったのに、なぜ打った後で聞かれたら答える？アンタはそんな偉いのか？
もう一度やった釘打ちは、4打目でやはり曲がってしまい、どこからか、なにやってんだ早くしろ！と怒声を浴びた。

「じゃあ、そろそろセリフある役者は作業抜けて、リハのスタンバイしてくださぁい」
松岡さんの声で、吉田さんや駒込さんが作業の手を止めて、ワラワラと楽屋の方へ向かっていく。じゃあオレも楽屋に行かなきゃなぁと両手の軍手を外して、楽屋の方へ向かっていくと、「おくむらー、どこ行くんだ？」と増井さんの怒鳴り声が足を止めた。
「いや、役者なんで楽屋に行こうかと・・・」
「まっちゃんは、「セリフのある役者は」って言ったろ？おまえセリフないだろ？よく聞いてろよ」
「あ、すーまセン」
ペコっと頭を下げてまた軍手をはめる。チ、やっぱバレタか。よく見てんなー。
張り物と張り物のつなぎ目をふさいで、壁に装飾をつけていった装置が、やっとほとんど出来上がった。そこでようやく、「警察官二人も準備に行っていいよ」となった。
楽屋で、衣装担当の美代子さんに手伝ってもらって警官の制服を着て、ネクタイの締め方を駒込さんに教えてもらい、髪の毛を甘い香りのする髪染めで金色に染めていった。顔のメイクもやり方が分からず、黒茶色な顔面にしてしまい、結局それを全部ぬぐって美代子さんにほとんどやってもらった。
準備が全て終わり、舞台の上に行ってみると、そこは・・・壁には絵画の額縁がつけられ、グラスや酒瓶などの小道具がお上品にテーブルに置かれている。強烈な照明のともしびに照らされた舞台上にあるそれら全てのもの・・・・そう、どれもこれもが輝いていた。ついさっきまで、ナグリやらのこぎりやらのゴツイ道具が散らばって男どもが怒鳴り合っていたのが嘘かのように。そんな中、メイクや衣装を終えた吉田さんや湯座さんが「あえいうえおあお」や「何ですって？　主人がそんなことを？」と発声練習をしている。全部のものが、ここからは非日常でありますと訴えているかのようだった。
こんな中、どうすればいいんだろう？　発声練習？　セリフもないのに？　柔軟体操？
腕立て伏せ？　制服着て？　ウわー何すりゃいいの？　仕方がなく、出入りするドアを開

けるときにつまづいたら困るなと思い、ドアを、バタン、バタン、何度も開け閉めを繰り返していた。

いよいよリハーサルがはじまる。
オープニングの音楽が暗闇の中で場内に流れ、緞帳がウイーンと小さいモーター音を出して上がっていく。吉田さんが「どうなってるんだ一体？」と最初のセリフを吐き出した。
舞台袖の薄暗い中でスタンバイしている僕は、緊張のために目が引きつっていた。ように周りからは見えていたのだと思う。実は、頭の中では緊張なんて１㎜も感じていなかった。
「ね・・・眠いぞコリャ」
昨日の夕方に目覚めて、トラックの積み込みをして後に店に働きに行って、と起きたまま２４時間が過ぎていたのだ。店でも朝からの仕込みでも動きっぱなし。さすがに若いって言っても体力が限界を迎えつつあった。
あー眠い・・・眠いぞ。眠いったら眠い。なんでこんなに眠いんだ？　あ、当たり前か・・・どうなってんだこりゃあ？　何じゃーコリャーは松田優作・・・・エ？出番？じゃないか・・・・みんなすごいなぁ、あんなにセリフ喋って・・・今の俺じゃ絶対無理・・ウわ！眠い！
パイプ椅子に座っていると、コックリコックリ船をこぎそうになってしまう。慌てて立ち上がり、舞台上覗き見して集中したり、舞台袖の中をウロウロと歩き回り始めたりした。
ついにきた出番のタイミング。湯座さんの「キャー」という叫び声を合図に、ドカドカと入っていく刑事と警察官。ドアを開ける。1歩踏み出す。暑い。眩しい。ライトか？　客席・・・田丸さんとスタッフがあちこちに散らばって座って観ているのが目の隅に見える。刑事の声。「捕まえろ！」吉田さんに駆け寄り、腕を抑えて捻る。「なぜこのようなことをしたか、じっくりお聞かせ願いたいものですね」と刑事の声がする。ジャーンと音楽。そして、暗闇になっていく。
暗転になり、舞台袖に必死に逃げながら、考えていた。
「なんだ、結構楽しいじゃん」
眩しいくらいの光の中で自分の一挙手一投足を他の人に魅せる。という事は、自分という生き物に注目してもらうことだ。その瞬間、自分は「焼き鳥屋のバイトの奥村君」ではなくなり、「一人の警察官」になる。演技の事は分からなかったが「なんだか楽しい」という気持ちが心のずっと底の方からポコポコと産まれてきたのだけは分かった。

4

土曜日の朝の伊勢佐木町は人気も少なく静かだった。開いていない店のシャッターの前には、真っ黒に汚れたおじいさんや昨晩飲みすぎた若者が転がっていた。
そんな伊勢佐木町の真ん中を僕は歩幅大きく歩いていた。いよいよ「トラップワイフ」の本

番、初めての舞台出演だ。これで「あのいて座の新人の俳優は誰だ？」「すばらしい」なんて話題になったらどうしようか？　あの焼き鳥屋も辞めちまうか？　女のコにもモテちまうか？　そしたらカノジョも出来るなぁ。かわいいカノジョにきらきらした目で「あなたの演技は最高ヨ！感動しちゃった！」なんて言われたら困っちゃうなぁ。う～ん、映画監督になるつもりだったけれど、映画俳優になっちゃうかもなぁ。忙しくなりそうだなぁ。困ったなぁ。あ、サインの書き方とか考えとかなくて大丈夫かな？　今日の本番観た人が感動して「サインください」なんて言われたら・・・あー、芸名もどうする？　本名だと家にまでファンが来ちゃうかもしれないし・・・う～ん・・・困った・・・・

劇場に入ると、団員全員が客席に座って軽く朝礼をする。田丸さんが昨日のリハーサルでのダメ出し、スタッフとの再確認をした後、最後に「よろしくお願いします！」という大声で各自が自分の仕事にそれぞれ散っていく。
役者は、衣装に着替えてすぐに舞台上に集合し、田丸さんが気になったシーンをやり直す。スタッフは、リハで気付いた所を修正していく。小道具が持ち道具の確認に走り回り、ガンガンガン！とナグリで釘を打つ音が響く中、吉田さんや湯座さんが田丸さんの言葉に耳を傾けている。

「アンタ、緊張してるの？」
客席に座っていたら、菊池さんが太い身体を揺らしながら横に立っていた。
「いや・・緊張ってわけでもないですけど・・・」
「奥村君さ、緊張しなさそうだもんね」
「いや緊張しないわけでも・・・」と答えようとしたら、どこからか「菊池どこだー？」と大声がした。
「ハーイ。今行きまーす！・・・まあいいわ。がんばんなさいヨ」
とのっしのっしと去っていった。なんなんだ一体？

お客さんが入ってくるのは、ロビーや客席にあるカメラを通して舞台袖のモニターに映しだされる。それなりに着飾った様子の老若男女が、ほとんどが二人や三人で連れ立ってチケットを受付に出していく。時間が進むにしたがって、座席の人影がどんどん膨らんでいった。もちろん僕の知らない人ばかりだ。こんなたくさんの人間が、わざわざ時間を取って、電車やバスを使ってこの劇場に集まってきたのだ。と言うと、僕が何かミスったりしたら、二百人以上の人たちが「今日は時間をかけて観に来たけどあそこでミスっていた」と思わせてしまうんだなぁ。そうしたら、いくらごめんなさいって謝ったって足りない。もう時間は戻らないんだから。
時計の針はそんな僕の気持ちを見透かすかのように淡々と回っていき、開演3分前の1ベルのブザーが場内に響いた。

ブウううううう。
すると、あれだけざわついていた客席の空気が変わっていく。お客さんたちの「本番始まるから準備しないと」という一人一人の気が発生していく。それは一つ一つは小さいけれど、場内でそれぞれがどんどんくっついていって、あっと言う間に大きな塊になっていくかのようだ。
「よろしくお願いします」と吉田さんが舞台袖の役者一人一人に挨拶して舞台に入り、真ん中の板付き場所についた。
「二ベルお願いします」舞台監督が言うと、再度ブザー音が場内を騒がす。
なめらかな音楽の後で緞帳がゆっくりと上がり、空気がまた変わった。
緊張。集中。暗闇。声。熱。闇。光。の入り混じった空気に―。

本番はトラブルもなく、順調に進んでいった。いよいよ警察官の最初の出番が近づいた。
暗いドアの裏で、警部役の欣二さんと警察官二人で息をひそめている。きっかけとなる、湯座さんの「キャアアアア」が出た。ドアを開け、光の中に飛び出していく―。
昨日のリハで見た光景とほぼ変わらなかった。ただ違うのは、何百というお客さんの目がこちらに向かっていることだ。たったそれだけの違いなのに、それだけじゃない。舞台上に漂っているものも吉田さんの顔も湯座さんの表情も、全部が違いすぎている。とてつもない緊迫感だ。本当に昨日リハをやった所と同じ劇場でやっているんだろうかと疑うほどに―。
プハ。
思わず噴き出した。「みんな真剣に何やってんの？いい年した大人が。ウソ？笑えるぅ」とか思ってしまった。一瞬してから、あヤベエ俺いま警官で殺人現場に踏み込んだ所だった、と思い直し、慌てて口を真一文字に結んだ。
吉田さんに駆け寄って腕を抑えて、暗転―。舞台袖に戻ったら、誰かに「何笑ってんだ！」と怒られるかなとちょっとビビったが、誰も何も言ってこなかった。そうか、セリフの無い警官の表情なんて誰も見ていないんだなぁとホッとしたような寂しいような気持になった。しかし、役者って、ちょっと笑ってしまっただけでそれまでの舞台をぶち壊しにしてしまうんだなぁ。たくさん稽古して、本番の緊張感を耐え続けても、演技が下手だとか顔が悪いとか声が悪いとかなんてボロクソに言われたりもするんだ。じゃあ、役者のやりがいってなんなんだろう？
なんてことをぼんやり考えながらも、舞台の上では、役者と観客の時間が続いていた―。

初回の公演は無事終わり、僕も舞台のすみっこでペコリと頭を下げてカーテンコールを味わった。役者全員が少し上気した顔で「お疲れ様です」を言い合っている。役者達はみんな劇場のロビーで来てくれたお客さんとあいさつをしているが、僕はこの回は誰も知り合いが来ないので楽屋に戻ったら、衣装の美代子さんがせっせと役者が途中で着替えた服を整理していた。

「あら？　ロビー出ないの？」
「知り合い、来てないんですよ」
美代子さんは「そうなの～。じゃあ夜の回に来るの？」と言いながら、スーツとワイシャツをハンガーにかけた。
「あの・・・ちょっと聞いていいですか？」
「なあに？　どうぞ～」
初舞台が終わったすぐ後ということで、僕の中にも高揚感があったのかもしれない。
「美代子さんも仕事しているんですよね？」
「仕事？　まあ、スーパーのパートのおばちゃんだけどね」とメガネの中の目をクリっとこちらに向けて答えてくれた。確か、前に子供たちは大学生くらいだったと話していた覚えがある。
「仕事だけで大変なのに、他の人が役者で出るための衣装を、なんでやってられるんですか？」
ん？と眉間にしわを寄せている。何かうまく伝わらなかったみたいだ。
「だから・・・自分が出るわけじゃないのに、何で人の事なのに出来るんですか？　衣装担当が仕事なら分かるんですけど、これでお金もらうわけじゃないですよね？　なのに休日つぶしたりして、よく出来るなぁと思って・・・」
美代子さんはようやく納得できたのか、アーアーと微笑みながら頷いている。そして、作業の手を止め、こちらをしっかりと見つめて喋り出した。
「そりゃ私だって役者として舞台立ちたいよ。今回のだって、面白い脚本だから、出たいなーと思ってた。でもさ、みんなと一緒になって、きれいなものを造るのって、楽しいんだよ。」
「きれいなものって、今回の「トラップワイフ」ですか？」
「そぉ」
「きれい・・・ですか？」汚いおっさんどもが怒鳴り合って建て込んでいる場面や出ている役者みんなの顔を思い浮かべたが、お世辞にもきれいなものとは言いにくい。こっちがちょっと腑に落ちてない表情なのを察して、美代子さんは「あのね奥村君」と言葉を続けた―。
「どんなものでもね、演劇って、きれいなものなのよ。そりゃあ、すごいつまらないとか途中で寝ちゃったとか言う芝居もあるけどね・・・でもね、どんなものでも、表に出ていない裏方さんが何人もいて、その人たちが、良いものを造ろう。って気持ちでやっているじゃない。一個のお芝居でも何十人とか、大きいものだと百人以上の人の思いが詰まるの・・・だから、どんなお芝居でも、絶対に一番きれいなところがひとつはあるのよ。そういうきれいなものを、みんなであーだこうだって言いながら創っていくのって、結構楽しいのよね。」
「あー・・・そうなんすか・・・」と答えたが、イマイチよく分からない。
「奥村君もそのうち分かるよ。舞台の裏方ってね、「大人の遊び」なの」
美代子さんは、フフフと微笑んで、また衣装の整理のために手を動かし始めた。僕は、もうこの話を続けにくくなりながらなんだか手持ち無沙汰になってしまい、鏡の前のイス

に座り、目の前にあったメーク用のドーランを手の中でカタカタと弄んだ。

公演は、土曜日の昼の回と夜の回。そして日曜日の昼の回と三回行われる。
最初の上演の昼の回が終わると、舞台上にライトを当てて、公演の記念撮影が行われた。
劇団員とお手伝いの人と全ての人が舞台に集合して、先ずは全員集合した写真を撮った。
その後、役者、舞台監督部、演出部、照明部、音響部、小道具部、衣装部、受付部、宣伝部、とそれぞれの部署で記念撮影を行う。田丸さんは大きなカメラを両手で大事そうに抱えて、それじゃみんな入んないぞ、ほらそこなにふざけてんだ、と大声を出しながらカメラを構えてパシャパシャやっている。
「演技のダメ出しより怒ってますね」と隣の増井さんに小声で言うと、「じいさんの道楽だからな。これのために芝居やってんじゃないかと思うくらいだ」と小声で返って来た。
「おまえ、このメンバーでもう一回同じ公演出来ると思うか?」と目線を客席に向けたまま増井さんが聞いてきた。
「イヤ、出来るんじゃないんですか? また声かければ・・・」
「・・・例えばだけどよ、三カ月あとに、評判良かったからもう一回やりましょうって言っても、同じキャストがまた出れるか・・・裏方も同じメンツにするなんてまずムリだろうな。この公演終わったら劇団辞める奴だっているし、スケジュール開けらんない奴も出てくるし。もう二度と全く同じもんなんて創れないんだ・・・芝居ってそんなもんなんだよ。」
ハア・・と答えながら、そうかそんなもんなんだなぁと思った時に、ハイチーズ!という怒鳴り声と共にフラッシュが光った。

記念撮影の後は自由時間となる。役者は銘々が食事をしたり少し目を瞑って休憩したり脚本を読んだりし始める。どちらかと言うと、発声練習をしたり誰かとワイワイお喋りするのでなく、夜の公演の為にエネルギーをためるかのように誰もが静かに過ごしている。
役者用の楽屋にはみんなの静寂が漂って、なんだかよそよそしい雰囲気になってしまったので、ドアを出て隣の裏方用の楽屋を開けてみた。こっちでは増井さんと松岡さんがイスに座って楽しそうに話している。
「お? どうした警官?」とにこやかに松岡さんが聞いてきた。
「いやちょっとあっちの楽屋、居づらくて・・・」
増井さんがマイルドセブンをポンポンと灰皿に叩きつけながら「アイツら、集中しようとしてるんだろ?」と聞いてきた。
「ええ。みんなピリピリしちゃって。欣二さんなんて座ったまんま目ぇ瞑って動きませんよ。なんか瞑想してるみたいです。」
二人とも、ハハハやっぱなと笑った。
「今回が三回公演するだろ? そうするとな、やっぱ人間がやることだから、いい時悪い時ってのが出てきちゃうんだよ。」と増井さんは手を波のように動かして表現した。

「それで、さっきの昼の回が緊張感持って大きなミスもなくて比較的うまく出来たろ？
そうするとその次の回ってのは、なぜだかどうしてもうまく出来ない確率が高いんだよ。」
「なんでですか？」
「それは、不安だった一発目がうまく出来た良かった良かったっていう役者の気のゆるみだったりするんじゃないか、と俺は思うけどよ。でも面白いのはな、そうなるからって役者が一生懸命気合い入れて緊張感持って、ってやったりしてもな、それはそれでやっぱり失敗するんだよ。」
「そうそう。今度は緊張でアガっちゃってセリフ出なかったりするんですよ。」と松岡さんが同意する。
「じゃあ・・・どうすればイイんです？」
ゆるみも緊張もダメなら？という素朴な疑問だったが「そんなの知らねえよ。オレ役者じゃねえんだから。」と増井さんに笑われてしまった。
「そこはねえ奥村君。その役者自身で探していくしかないのかなぁと思いますよ。その人なりの、ちょうどいい、うまくいく方法をさ」
松岡さんの穏やかな口調の中、マイルドセブンの煙がゆるゆると天井に登っていった。

夜の公演の上演中、その時は突然やって来た。
警部役の欣二さんが、夫と妻がいる席にて、夫が妻以外の女性と重婚していた場合は、夫を逮捕する可能性があることを長セリフでとうとうと語る場面だ。僕は、警部に同行した警察官として舞台上に出ていた。欣二さんはメガネの奥から鋭い視線を吉田さんに向けながら、舞台上をコツコツと動いてセリフを語っていた。
「・・・というわけで、ご主人。以上述べた点が証明された場合は、私は今日連れてきた私の部下に、奥様ではなくあなたを逮捕しろと命令して―」
うんうん。それで、警察署へ連行しなければいけなくなります。だよね。と、ドアの前で気をつけの姿勢で立っている僕は聞いていた。
「命令して・・・・どこへ連れて行くんでしたっけ？」
ん？
「すみません・・・・いや―年のせいかな？　どこへ連れていくのかすっかり忘れてしまいました」
ゲ？・・・・セリフじゃない・・・・アドリブだ。しかも「忘れた」って思いっきり言ってる・・・
「ちょっとお待ちください。どこだったっけなぁ・・・・もう少しで思い出せそうなんですが・・・・」
吉田さんも湯座さんも、不安そうな目で欣二さんを見ている。欣二さんは腕を組み、演技でなく本当に考え込んでしまっている。
「・・・いったい・・・僕をどこに連れていこうと言うんですか？」

これまたアドリブで、吉田さんが間をもたそうと必死に叫んだ。
「だからそれを思い出しているんです！　いいから少しお待ちください！　黙っててください！」と欣二さんが逆ギレのように叫び返した。アドリブで繋ごうとしたのに黙ってろと言われ、吉田さんの抑えきれない感情が小さく口をパクパクさせている。
これ・・・どうする？　オレが「警察署ですよね？」と言ってもイイのかな？　でもセリフ無いのに急に喋り出したらおかしいか？　オオ、欣二さんが本当に悩みだしちゃっている。プロンプが舞台袖から小声で警察署と言って伝える・・・は、このタイミングだと出せないか。次の瞬間に欣二さんが思い出すかもしれないし・・・だいたい、欣二さん楽屋で目をつぶって集中していたんじゃないの？　エー？　このままうんうん唸っている警部をお客さんに見せ続けるの？
「・・・ひょっとしたら・・・・主人を逮捕して警察署に連行しようというお話しですの？」
沈黙を、湯座さんの高い声が破った。
「そうです！　その警察署に連行しようと言いたかったのです。」
そうなると、逆にあなたの立場が危うくなりますねぇご主人。と、欣二さんは何とか元のセリフに戻っていった。出なかった一言が出ると、そこからは今まで止まっていたことなど無かったかのように、スラスラとセリフが出ていく。舞台上のみんなの目を見ると、ホッとした安堵の色を浮かべている
暗転になり袖に引っ込んで即座に、欣二さんは吉田さん湯座さんに手を合わせてゴメンねゴメンねと謝った。いえいえ。大丈夫です。と二人とも答えていたが、その目は全く笑っていなかった。

5

昨日の夜の回の公演は、客席から観てて血圧上がりっぱなしだったけどな。と田丸さんが朝令で言うと、欣二さんは「申し訳ありません」と大声で返しみんなの笑いを誘った。
ついに最終の日曜日だ。泣いても笑ってもあともう一回しか出来ない。美代子さんに手伝ってもらって警官の制服を着終えると「奥村警察官、最後だから頑張んなヨ！」とバンと背中を叩かれた。
舞台に行くと、照明さんが明かりのアタリをチェックしている。舞台監督の松岡さんは増井さんとナグリを持って装置の手直しする所を話している。音響さんはドアピンポンの音やエンディングの音楽を劇場内に響かせている。小道具さんはテーブルの上のグラスや酒瓶をキャイキャイ喋りながら並べている。最終日だからって今までと全く同じで大丈夫だじゃなくて、改善すべきところは直すんだなぁと感心していた。すると、そんな舞台の上にソファに座って客席を見つめている吉田さんがいた。
「どうしたんですか？」

「いやー・・・・あと一回で終わっちゃうんだと思うと、寂しくてさ。僕はこの3カ月くらい、このマイク・ダルトン役に没頭してきたからね・・・」
「はあ。そうなんスか・・・」
「だからって仕事しないで集中してたわけじゃないけどさ。」と吉田さんはこっちを見てニコリと微笑んだ。
「でもね、仕事してて、取引先の人と話してる時でも、不意にダルトンが来るんだよねぇ。ああこの喋り方はダルトンじゃないなぁ、みたいに。」
「へー、そうなんですね。」と答えつつ、吉田さんは食品関係の会社の営業だと言っていた事を思い出した。
「こんな我々みたいに、公演二日で三回です。みたいな素人劇団の素人役者でもこんな寂しい思いになっちゃうんだから、プロの人たちの、一ヵ月毎日公演してます。みたいな人たちは、もっと寂しいのかね？」
さあどうなんでしょうね、と答えながら、ちょっと疑問が沸いた。
「じゃあ吉田さん。例えば、次の秋の公演でまた「トラップワイフ」やります。吉田さんはまたダルトン役で。ってなったら、嬉しいですか？」
え？次で？と言った後、しばらく吉田さんはうーんと考えてから言った。
「それは・・・いやだな。田丸さんにお前やれって言われても、断るかもしれない・・・何でかって言うとさ、僕としては、今の自分の出せるものは今回出した気がするんだ。そりゃあ、うまくできなかった所もたくさんあるけど、それも含めて今の自分の力だからね。だから、例えば、また秋に同じ物やるぞってなっても、今回の演技にちょっと上塗りしたぐらいのものしか出来ないかなぁ。そんなものをお客さんに見てもらっても、僕がお客だったら「主役の演技ほとんど変わってないじゃないか」って怒るよね。」
吉田さんがへへへと笑う。僕もへへへと返す。ただそれだけで、また吉田さんは客席に目を向け、じっと見つめ始めた。僕も、この人には何が見えてるのかなぁと客席を見てみたけど、暗闇の中で気持ち悪いほどに整然と並んでいる座席と、大きな生き物の口のような出入口のドアしか目には入らなかった。

最後の公演の本番。「気合いが入った」ではなく「力を出し切る」でもなく「悔いのないように」とも違う、一種独特の雰囲気がみんなの中をまとっている。熱気とも冷静とも違うこの空気を僕のあまりうまくない表現で言ってみれば「これでおしまい。という事だけを役者も裏方も受付も誰もが共有している、終わりに向けた儀式」という空気だろうか。
ラストなのだから、さぞかし感動的な展開が起こるのかと思いきや、本当に何のドラマも逆転も起きずに、芝居の幕は流れていった。
昨日、大ストップした夫婦の前で警部が長セリフを言う場面が近づいた。僕と欣二さんは、舞台袖に置かれたスタンバイ用のパイプ椅子に並んで座った。
「奥村君・・・セリフ覚えは、いい方ですか？」

急に欣二さんが話しかけてきた。今まで、稽古中でもほとんど話しかけられたことはなかったから、ちょっとびっくりした。
「セリフ覚えですか・・・セリフ、覚えたことないから分かりませんね。」
「ボクぁね、全然覚えられないの。ほら、セリフ一度覚えたら本番までにもう一度忘れた方がリアルな反応ができる。って言うじゃない？　だからやっと覚えたものを忘れようとすると、それはすぐ忘れられるの。昨日みたいに。」
「本番前に忘れる。じゃなくて、本番中でしたけどね。」
「そうなの。ちょっと忘れるタイミング間違えちゃったみたいなんだよねぇ」
どう答えていいか分からずに、ハハハ、と乾いた笑いをしてみたら、ムフフと欣二さんも満足そうな顔をした。
キッカケがあってドアの中に二人で登場し、僕はドアの前で気をつけの姿勢を取った。今回は大丈夫なのか、でももう一度同じところで詰まるのもそれはそれで面白いなぁなんて他人事のように考えながら、長セリフを喋る欣二さんを見ていた。
欣二さんは、長いセリフを、今回は忘れずに言い終えられた。そこで気付いた。―ひょっとしたら、欣二さんはあのパイプ椅子に座っていた時に、また同じミスをやるんじゃないかという怖さが突然に襲ってきたんじゃないか。だから、今まで話したことなんてほとんどない隣にいる僕にとりあえず話しかけて、恐怖を少し和らげようとしたのかもしれない―。
暗転の暗闇で欣二さんと袖に戻る時、「良かったですね」と小声で言うと「良かったよぉ」とおどけたような声で答えてくれた。

舞台はラストシーンに向けて、留まることなく進んでいく。客席を映したカメラのモニター画面を見てみた。客席では、本当にいろいろな人が座っていて、その人たちの二つの目が舞台の上の動きや言葉をじっと見ている。お客さん達は、昨日欣二さんがセリフを飛んで止まった事なんて知らない。二日前には舞台上に何も建って無かった事も知らない。もっと遡れば、稽古で僕が「チンピラ歩き」と怒られた事も、湯座さんが同じセリフの言い方を6回続けてダメ出しされた事も、吉田さんがプレッシャーで腹痛になり稽古休んだ事も、全部知らない。この今やっている上演が、全てなのだ。観てくれたお客さんに、でも稽古ではうまく出来てたとか昨日は成功したとか言っても何にもならないし、どんな言い訳も通用しない。これは、刹那のような、一瞬のような、儚いのような・・・なんて言えばいいんだろう・・・強いて言えば、潔い。だろうか？　うん。たぶん、潔い。だ。

「カーテンコールっていうのはな、お客さんに「あなたの貴重な時間を使ってこんな所まで来て、こんな私の演技を観てくれてありがとうございます」っていう感謝の気持ちなんだよ。」
と教えてくれたのは誰だったか・・・まあいいや。とにかく、最後の公演のカーテンコールで頭を下げた。初日のカーテンコールの時に「背中を丸めて頭を下げちゃってるからみっと

もない」と言われたので、自分の中では、精一杯背中を伸ばして頭を下げた。こんな俺みたいな警察官を見てくれてありがとうございました。と思いながら―。
楽屋で、警官の制服を脱いで、金髪に染めるための髪染めをシャンプーで洗い流し、汚いGパンとTシャツに着替えるとすっ飛んでいった。
さあバラシだ。
バラシ。とは、その名の通り、舞台上に建てたものを全てバラバラにして、元のまっさらな状態に戻すことだ。だからって闇雲にバラバラにしていったら、壁にした張り物だけでも3m近くあるから危険だ。みんなで声を掛け合いながらやっていかないといけない。
舞台上では、バールやナグリを持った男どもが脚立に昇って、そっちだこっちだ持ってろと怒鳴りながら3mほどの張り物に群がっていた。こりゃケーキに集まるアリの大群みたいだなぁ。
工具箱からバールとナグリを取り出し、次々と外されて床に置かれた木材に刺さったままの釘を抜いていった。しかしまぁみんな、男どもは仕込みの時と違って、楽しそうに生き生きとバールで装置の釘を抜いて装置を倒していっている。装置の建て込みはセンチやミリ単位で正確な作業を求められるけど、バラシは単純に釘抜いて倒していくだけだから大雑把でイイんだものなぁと考えながら手を動かしていると、一本の釘が引っかかって抜けない。どうやら木の中で曲がっているみたいだ。アレ?アレ?としゃがみながらバールを右に傾けたり釘を逆から叩いたりしていると、頭の上から
「奥村。お前なにやってんだ?」
エー? なんでこういう所に気づくの? と見上げるとやっぱり増井さんだ。
「これは釘がこっちに曲がってんだろう? だからこっちから叩いて、こっちに引っ張るんだよ。」
とスルスルと抜いてしまった。
「まぁったく、頭使えよ。」
と捨てセリフを残して倒れそうな張り物の方に行ってしまった。なんでなんだ? 若者がミスすると鳴るようなセンサーでも付いてるのか?

出た木材は次回また使えそうな状態や長さのものは束ねていく。張り物や木材を今度は大型エレベーターで下の搬入口まで下げて、トラックに積み込んでいく。それ以外にも、小道具、衣装、メイク道具、受付で使った事務用品、お祝に届けられた酒瓶やお菓子なんかまで積み込まれる。そんな誰もがバタバタした中で、女性陣は5名ぐらいが電車を使って先に稽古場へと向かう―。「打ち上げ」の準備のためだ。
エイヤっとトラックに入るだけの荷物を積みこんだら、それらをブーンと稽古場まで運んで行き、稽古場の隣の倉庫に張り物を入れていく。小道具や衣装の入った段ボールも稽古場の上の階のアパートの一室「いて座専用部屋」に運んでいく。―ここの大家が田丸さんだから出来ていることだ―。こんな事をしていると、もう外は暗くなって夜の7時を少し回って

おり、みんなの顔にも疲労の色が浮かんでいる。
「よぉし、じゃあオレはトラック置いてくるから、みんな中に入ってろよ。」と増井さんが言って、ようやっと片付けが終わりとなる。額の汗を拭いながら、芝居って体力勝負なんだなぁとしみじみと思った。
稽古場のドアを開けると、長テーブルが四角に並べられ、その上には瓶ビールとグラス。そして、ピザや刺身やポテトやいなりずしなんかが僕たちを待っている。
おお。これが、「打ち上げ」ってヤツか。

6

長方形に並んだテーブルの、短い一辺の主座テーブルに座った田丸さんが立ち上がって、打ち上げ開始前のお言葉のようなものを滔々と語っている。
その後で、来賓の人のお言葉。昔に劇団に入っていた人とかが語り始める。
僕はすみっこの席に座って、稽古場の中央、長方形の真ん中にあるテーブルに目をやった。テーブルの上には、いろいろな人がお祝で受付に持ってきた日本酒の一升瓶が並んでいる。アアあれは店で出してる結構イイ酒だなぁ。あれは安いのだ。あっちは知らない銘柄だなぁ。こんだけあれば足りるのか？　そう言えばビールは冷えてんのか？　となんだか頭が仕事モードになっていた。
「じゃマアみんな早くしろって目で見てるからよ。それでは、グラスを持って。おつかれさまぁ。かんぱーい！」
という田丸さんの掛け声でみんなカチャカチャとグラスをぶつけ、おつかれーと声を掛け合っている。誰もの顔が、ひとつの事が終わったという解放感にあふれて、そんな気持ちを他の人と共感したい、と上気していた。最初に座っていた席なんか本当にその瞬間だけだったかのように、乾杯の後は何人もワラワラと立ち上がって、自分の共演者だったりお世話になった人だったりというお目当ての人に近寄って話している。そんな雑然としている中でトラックを戻しに行った増井さんが戻ってきて、二度目の乾杯が行われた。
「奥村君、あんた、お疲れさんね」
という声に横を向くと、菊池さんが瓶ビールを持って立っていた。アすいません、と言ってグラスを差し出すと、トクトクと注いでくれた。
「どうだったの？　初舞台は？」
ああそうか初舞台だったなぁと思い出しながら、「ハア、まああんまりうまく出来なかったと思います」と答えた。
「そう？　でも警察官に見えてたよ。」
コレは・・・・はげましのウソだ。初舞台だったから自信つけさせようとあえて上手く出来たかのように言う的な・・・

「あ、アリガトウゴザイマス。」
菊池さんは、自分の言葉に納得したので満足したのか、うんと頷くとがんばんなさいよと言葉を残して、ビール瓶を持ったまままたのっしのっしと他の人に近づいて行った。
コップに入ったビールを飲みながら、自分の周りをぐるりと観察してみた。この時の演技は良かったとか小道具大変だったねとかあちこちで語り合っている。みんなやり切ったとかがんばったとか思っているんだなぁ。俺は演技って言えるほどのものじゃなかったんだろうし、建て込みとかの作業も釘打ち失敗ばかりだったし、満足とかよくやったみたいな充実した気持ちなんかには到底なれないなぁ。それに職業病なのかもしれないけど、飲んでもどんどん頭が落ち着いてきて、お酒は足りてるかとか誰が酔っ払いだしたのかとかを考えてきている。でもまあ、全部が終わって、このビールを口に運んでいる瞬間、「なんだか気持ちがいい」事だけは確かだった。

宴が進んでいくと、もうイスに座らずに床に直座りして車座になって熱く演劇論のようなものを語りだす人たちが出てきたりした。しかしまあ、名前もよく知らない「打ち上げ」だけに来る人って多いものだ。バラシをちょっと手伝いましたって人もいるが、中には、何の作業もやらずに声をかけられたから来ましたってのに堂々と酒飲んで酔っ払って、劇団員よりも偉そうにしている人までいる。こういう人はあまり関係のないにぎやかな酒の場にタダで来れて楽しめるんだ。落語の「居残り」みたいな人だな。とか思っていたら、赤い顔をした松岡さんが近づいてきた。
「奥村君。おつかれおつかれ。ろうでしたか？　初めての舞台は」
→酔ってるだろ。
「いやー。いろいろ勉強になりました。」
「べんきょ！　えらい！　若い人はそうじゃにゃいといけませんよ。」
→酔ってるよね？
「すいません。全然戦力にならなくて。」
「そんにゃことありませんよ。君たち若い人が、これからがんばってもらわにゃいといけないんだから。」
→絶対酔ってるって。
「はい。じゃあ、今度はもうちょっと働けるようにがんばります」
「そう！　たのむよ！　ペンキ屋モウつかれた！　だからちゅぎもね、よろしくおねがいしましゅヨ」
→ハイもう酔ってる確定ね。
「・・・分かりました。」
松岡さんは手を水平チョップにして、おでこにトントンと何度か当てている。何だ？と？マークの表情で眺めていると
「これがわかりましぇんか？　ダメだなぁ警官の癖に。これはねぇ、敬礼ってものなんで

しゅヨ。敬礼。」
→ああ・・酔っ払い。
はあ、と一応やんないといけないのか？とで、とりあえず同じようにおでこに手を当てると、松岡さんは焦点の合わない目でもう一度敬礼して返すと、どこかに行ってしまった。
「奥村。オイ！」
今度は誰だと思い声のする方を見ると、田丸さんが主席に座ったまま呼んでいる。近寄って
「なんですか？」と言うと、いつもは厳しい顔なのに、妙にニコニコしたえびす顔で
「あんた、今回初舞台だったけどな、でも最後は警察官に見えてたよ。」
と褒めてきた。普通はこう言われたら「やった」「俺の役者の才能が認められた」とか喜ぶべきなんだろう。なのに悲しいかな職業病。笑顔の田丸さんの目線は泳いでいて、グラスに入っていたのは日本酒。これまた酔っ払って気分が良くなったからあいつにも一つくらい言っておいてやるか。的な発言なんだろうと分かってしまった。
「奥村君さ。土曜日の昼の公演の時、いっとう最初に出る時に笑ってたよね？」
と鋭く言ってきたのは川村さんだ。そうかこの人プロンプで舞台袖に常にいてずっと観ていたから気づいたんだ。
「そうスね。笑っちゃいました。」とココは認めた。川村さんはどうもマジメ色が強く、深夜の居酒屋で働いている僕とは住む世界が違う感じがしてなんだか関係が一歩踏み込めない。反論するよりは相手の言う事を聞いておく方を選んだ。
「警察官が容疑者の所に踏み込む時に、笑っちゃダメでしょ？　プロンプで見ててさ、警官何笑ってんだとか思ったよ～。」
「すません。」と謝りながら、ちょっとぐらい笑っただけでグチグチ言うんじゃねえよ。と全く反省していない自分がいて、それはそれで自分にちょっと笑いそうになってしまった。
「初めてだったんで、今度気をつけます。」
「俺より初舞台早かったんだからさ。今回サ、初舞台、入ってすぐ出来て、良かったね。」少しの喋り言葉の中に初舞台って単語を二個も入れてきた。なんだやっぱり自分より後輩の癖に先に舞台立ちやがってって思ってたんだな。しかしまあ、最後の「良かったね」は全然「良かった」って気持ちが入ってなかったぞ。うー、怖いねぇ。

夜の１０時を回る頃に、ゆっくりと田丸さんが立ち上がり、「オーイそれじゃみんな」と号令を出した。ざわついていた喋りや笑い声が「オーイ」と言われるたびに次第にボリュームが落ちていき、やっとのことで静寂となる。
「まあ宴たけなわのトコだけど、時計は止まっちゃくれねぇからよ、じゃあそっちの方に集まってみんなで記念撮影して、一回締めとします。」
テーブルを出来るだけ端に寄せて、全員で壁の方にギュッと詰まって写真を撮った。にぎやかにパシャリパシャリと終えると、田丸さんを中心に丸くなる―。
「・・・それじゃあ何とか今回の公演も無事終わって、また次回という事で、今回の成功と

次回の公演の成功を願いまして、三本締めで締めさせて頂きます。じゃあいいか？
それでは皆様！　お手を拝借！　ヨーオォ！」
パパパン、パパパン、パパパンパン。
イヨ！
パパパン、パパパン、パパパンパン。
モいっちょ！
パパパン、パパパン、パパパンパン！
稽古場の中のいろんな気持ちが合わさった三本締めが響くと、あちらこちらからパチパチとした拍手とお疲れ様の声が飛び交う。じゃあ一回目の締めだから、残りたい奴らはまだ残ってても構わないからよ。という上機嫌な田丸さんの声が聞こえた。
他の人に混じって、簡単な片づけを手伝っている時、座ってイカのするめを齧っている増井さんと目が合った。増井さんの口が動く。
「た・・し・・・た・・・ヨ」
みんながざわついてるし、ちょっと距離があるしで聞こえない。「ハ？」という表情を見せると、また口が動く。
「た・・しか・・・た・・・ヨって・・てんだ」
やっぱ聞こえない。もう一度、「エエ？」て顔をした。
「たくもぉ・・・がねぇなぁ。・・・・たかよって聞いてんだヨ！」
わからん。しょうがないので近寄っていき「何ですか？」と聞いた。
「・・・ったく何度言っても分からないんだもんなぁ。嫌になっちゃうよ奥村ちゃぁん。」
とぼやきながらまたするめをクチャクチャしている。増井さんは下戸なので、いつもと同じ顔だ。またこのおっさん怒んのか？とちょっと身構えた。
「あのな―」
ア来るなこれ。釘打ちの事か？　演技の事か？
「・・・楽しかったのかヨ？って聞いたんだヨ。」
あ・・・はい。楽しかったです。と答えながら、打ち上げが楽しかったって事か舞台に出て楽しかったって事か装置の大工作業が楽しかったって事か公演の為の何か月かが楽しかったって事か分からなかった。
でも、増井さんがどれを指していても関係なかった。
どれもすげえ楽しかったから。
増井さんは、そうか、それならいいんだ。とまた悪そうにニヤリと笑って、また新しいするめに手を伸ばした。
こうして、僕の最初の公演は、涙のドラマチックな展開も最後のどんでん返しも愛の告白もなく、イカのするめで幕を閉じた。

終章

夏の焼き場は暑い。
焼き場の前に立っていた加山さんが、汗を拭きながら振り向いて
「よぉへいちゃん。ちょっと替われ。」
と命じてきた。狭いカウンターの中でお互いの体をうまく交差させて場所を交代する。パチパチと火が爆ぜる中、ほとんど焼きあがった串を持ち、タレの入った壺に漬けてからまた焼き場に戻すとタレが火元に滴って煙が上がり、周りの温度が上がった。汗を拭いながら焦げつかないように気を付けて見ていないといけない。レバーや皮は火の通りが速いが、鳥モモや軟骨は火が通りにくい。焼き場にも、火が強い場所や弱い場所がある。その火の強弱を把握して、いかに同時に焼き上げられるかが腕なんだぞ。と教わった。
店の奥に置いたテレビでは、朝7時のニュース番組が流れており、髪の長い女性アナウンサーが原稿を流れるように読み上げている。
そのテレビの横の壁にかけられたカレンダーは「8月」が、自分の下に日付の数字を従えている―。

あの「トラップワイフ」の公演が終わって、二カ月以上が過ぎた。
観劇した他の劇団の人が「なんだあの警察官の新人は？　いて座はイイ新人俳優が入ったなぁ」とは言ってなかったようだ。マスターの加山さんは、公演前に「公演がいつなんだ」とは聞いたが、観には来なかった。ただちょっと聞いてみただけみたいだった。
そんな感じで、何も無かったかのように、今も全く変わらずに「焼き鳥屋の兄ちゃん」をやっている。
僕の方はそんな感じだが、いて座では・・・劇団を辞めてしまった人が何人かいる。僕と一緒に警察官をやった若い男性も辞めてしまった。警官二人でダメ出しされ続けたのは僕の方なんだけどな、とは思った。辞める理由は人それぞれだが、仕事や家庭が忙しくなって続けられなくなったり、劇団のやり方に不満を持って辞めたり、役者として入ったのに思ったより出演させてもらえないから辞めたり、劇団の活動がつまらなく感じてしまったり、とかが主な辞める理由みたいだ。―確かに、同じメンツで同じことは二度と出来ない。だけど、去る者いれば来る者ありで、何か月か前の僕みたいな新人が緊張した顔で稽古場に見学に来たりもしている。
公演が終わった時にやっぱり考えた。さあこれからどうしよう？　やっぱり目標は「映画監督になって日本映画界の救世主となる」なのだが、芝居作りは映画と通じる所も多いし、まだ学べる部分もたくさんありそうだ。マア楽しかったしなと思いながらズルズルと稽古場に通っているうちに、発声などの基礎稽古の日が何回か続いて、そして次回公演の演目が決定した。
次回公演は「きれいな口紅」という日本の戯曲だ。戦争中に戦地へ行く兵隊の男性に恋をし

た女性が、親友もその男性に恋心を持っていると知ってしまう。そして、現代の初老となったその女性に起きた出来事。という昔と現在の二元的なストーリーだ。
実は、今日の夜の稽古で、誰がどの役となるかというキャストが発表される予定だ。脇役やチョイ役が何人か出る芝居で、誰でもチョイ役になる可能性がある。前回に新人で出た僕がまた続けてキャストになれるかは分からない。でも発表はやっぱりドキドキするものだ。
「僕の俳優としての天性の才能を田丸さんは見抜いて、次回作で異例の主役に抜擢とかあるのか？」
と妄想をして楽しんでいるが、人に話す度胸は無い。—とか言っているうちに、やっと鳥モモに火が通った。大皿に全部を並べて、「お待たせしましたぁ」とカウンターのお客さんに渡す。
劇団に入って、一個だけ分かったことがある。
「天性」だとか「才能」だとか「向き不向き」だとか「みっともない」だとかは、どうでもいい。
人生、やったもん勝ち。という事だ。
僕自身、今回舞台に立つというのをやってみただけで分かった事がたくさんある。その情報は、いくら机の上で俳優や演技について勉強してみても分からなかった事だろう。どんなに偉そうに知識を並べても、やってみないと分からない。
やって、こりゃ自分に合わないと思ったら、逃げればいい。逃げた後でどう言われようと、もう自分がいないんだから知ったこっちゃない。そしたら、また別の「何か」を探せばいいだけの事だ。
と、ラークマイルドの煙を吐き出して考えていると「はいいらっしゃーい」とマスターのど太い声がした。暖簾の方を見ると、もうべろべろの瞳をした男女が「マスター！イエーイ」と入って来た。
あ、あのお客・・・いっつもトイレでげろ吐くんだよなぁ。
「いらっさいませー」

（了）